

## 外国籍幼児の園生活への適応過程に関するエスノグラフィー的研究

発話場面における社会的調整を中心に

管田 貴子（弘前大学）

### 1 はじめに

近年、個々の外国籍幼児の事例から、幼児も異文化適応上の困難やストレスを経験することが指摘され、研究対象として注目されてきた。本研究では、保育所に入園した外国籍幼児の発話や行為から、外国籍幼児が保育士や日本人幼児とのかかわりを通して園生活に適応していく過程を明らかにし、外国籍幼児を受け入れる保育所の課題を示すことを目的とする。

### 2 研究方法

本研究では、外国籍幼児の適応過程を分析するために、エスノグラフィーの手法を用いた。エスノグラフィーの手法を用いることで、外国籍幼児の行為や発話から適応過程を捉えることが可能となる。対象児を R(2 歳男児)に選定した理由は、(1)園と家庭において異なった言語が使用される幼児は、園生活への適応が困難になるという事例が報告されており、(2)保育所の子育て支援の場から 3 歳児クラスへと移行した R の適応過程から、保育所内の 2 つの場における外国籍幼児の受け入れの課題を明らかにできると考えたためである。

対象児 R は父親・母親 M・姉(17 歳)の 4 人家族で、父親と母親 M は留学のために来日し、R は日本で生まれた。父親は日本の企業に就職し、母親 M も就職した後は、R を私立 Y 保育所の 3 歳児クラスに預けた。家庭では日本語と中国語を併用していた。Y 保育所の子育て支援において、2006 年 4 月～10 月まで 14 回、3 歳児クラスで 2006 年 11 月～2007 年 3 月までに 15 回保育補助として参与観察を行い、メモをとってデータを収集した。また保育士や母親 M には、観察中や観察後に非構造的インタビューを行った。子育て支援と 3 歳児クラスでは、ともに外国籍の親子は母親 M と R のみであった。

### 3 結果

R の適応過程を「R と日本人幼児」、「R と母親 M」との関係から、時系列的にまとめた。子育て支援における R のかかわり方の特徴としては次の 3 点があった。第一に R は他児の名前を呼ぶことはあっても、言葉でコミュニケーションをとることは少なく、第二に R は笑顔で他児に近付くことで一緒に遊びたいという意志を伝え、追いかけて、手をつないで歩くといったかかわり方が中心であった。第三に、他児とのトラブルでは R はすぐに手を出すことが多く、言葉によるかかわりは少なかった。このように他児を叩き、母親 M にも反抗する R の姿から、保育士は園生活への適応とは逆行して R は「ひどくなっている」

と捉えていた。

3歳児クラスに入るとRは、おもちゃの貸し借りをはじめ、1人遊びから複数での遊びができるようになり、言葉の模倣を含めた発話による日本人幼児とのかかわりも増えるという変化が見られた。保育士は、Rの他児とのかかわり方や、園のルールの獲得（貸し借り、片付け）から、Rは園生活に慣れたと捉えた。

#### 4 考察

##### (1) 適応の指標

子育て支援と3歳児クラスの保育士はそれぞれの視点から、Rの適応過程を捉えていた。

子育て支援の保育士がRの適応の指標としたことには、Rが日本人幼児を叩くことなく「仲良く遊べること」や、「おもちゃの貸し借り」といったルールの獲得することがあった。しかし、このルールをRは獲得しなかった。

一方3歳児クラスの保育士は、Rのほうから日本人幼児に「かかわろう」として「一緒に遊ぶこと」や、「おもちゃの貸し借り」ができることを適応の指標とした。またRが、3歳児クラスの日本人幼児と同じように「集団活動に参加すること」や「おもちゃを片付けること」、「身辺整理を自分ですること」といった集団生活のルールの獲得することも、Rの適応として捉えた。さらに母親Mとの関係では、Rが母子分離をしても「泣かずに遊べる」ことや、園に来て熱を出さずといった「体調不良を起こさないこと」が、Rの適応として保育士に重要視された。

本事例から、適応過程を捉えるためには、以下の2つを踏まえることが指摘された。それらは第一に、外国籍幼児とその家族（子育て支援では特に母親）の背景を踏まえることであり、第二に外国籍幼児を取り巻く集団の変化を踏まえて適応過程を捉えることであった。

##### (2) 外国籍幼児を受け入れる保育所の課題

本事例から、外国籍幼児を受け入れる保育所の課題としては、以下のことが示唆された。

まず子育て支援においては、第一に母子関係や母親による介入の方法に問題がある場合、保育士は母子を離すだけでなく、具体的な支援を行う必要があるが、その支援が実践されにくいことである。これは週1回数時間という限られた時間のなかでは、保育士と母親Mとの信頼関係が築かれにくく、双方向的なコミュニケーション（調整）がなされなかったことを意味する。

第二に、外国籍保護者が保育所の子育て支援の対象とされにくい点である。外国籍保護者は日本人保護者と同じように、子どものために同年齢の遊び相手や安心して遊べる場所を探しており、外国籍保護者も子育て支援の対象としていくことが今後ますます求められると考える。

第三に、外国籍保護者が子育て支援に参加した場合、母親Mのように緊張感をもって過

ごす場合がある。このような母親 M の緊張感は最後まで変わらなかったことから、外国籍保護者と日本人保護者との関係づくりのためにも保育士による直接的な援助が求められる。

3歳児クラスの R の姿から見えた保育所の課題としては、以下がある。保育士は R が「友達と遊ぶこと」、「集団生活のルールを獲得したこと」から、園生活に慣れたと見なして、「調子がいい」と捉えた。しかし保育士が R は問題なく慣れたと見なした後に、R は保育所に来ると熱が出るという体調不良を起こした。すなわち保育士は、外国籍幼児が日本人幼児と同じように集団生活ができるようになることを、適応の指標とする傾向にあった。しかし、気になる子どもを軸にした保育実践の必要性が指摘されているように、外国籍幼児に対しても、柔軟性のある保育を実践していくことが保育所の課題と言える。

今後は、外国籍保護者に対する保育所以外での子育て支援を参考にして、具体的な保育所での援助のあり方を検討するとともに、外国籍幼児や外国籍保護者との双方向的なコミュニケーションや柔軟なカリキュラムづくりに必要な保育士の資質とトレーニングについても検討することが課題である。

### 主要参考文献

- Furnham, A. & Bochner, S. (1986) *Culture Shock: Psychological reactions to unfamiliar environments*, London and New York, Routledge.
- 倉地曉美 (1998) 多文化共生の教育 勁草書房
- 柴山真琴 (2001) 行為と発話形成のエスノグラフィー - 留学生家族の子どもは保育園でどう育つのか 東京大学出版会
- 萩原元昭 (1998) 14 章 多文化化と幼児教育 萩原元昭 (編著) 放送大学教材 幼児教育の社会学 pp.145-155
- 箕浦康子 (1999) フィールドワークの技法と実際 - マイクロ・エスノグラフィー入門 - ミネルヴァ書房